

大衆娯楽と社会不安

——戦後日本における「公認トバク」および性風俗の一側面について——

津 金 沢 聡 広

はじめに

敗戦を契機とする戦後日本における「欲望の解放」¹⁾は、いわゆる大衆娯楽^{<註1>}の側面についてみると、それは今日とりわけ、広範な層にわたる公認トバクの浸透、あるいは、主としてマス・メディアによる性風俗のゆがんだ拡散として、きわだった形で、その特徴をあらわにしつつあるようにみえる。

「欲望の解放」が人間としての基本的なあらゆる生活要求の実現を意味するならば、それ自体は望ましいことですらあろう。そうした要求を抑圧され、拒絶されてきた人々の、その正当な復権にあたって、いわゆる大衆娯楽が、安直なしかも魅力ある通路のひとつでありうる点も否めまい。ただ、そこでの問題性の一面は、すでに指摘されたように、さしあたり、次のような点に要約されよう。

第一は、清水幾太郎(1951)のいう「各人の苦しい生計の中で、大衆娯楽が占有している不当に大きな面積¹⁾」という側面にかかわる問題である。第二には、野口雄一郎、稲葉三千男(1960)が指摘しているように、われわれが今日享受しうる対象は、主として「受動的な観覧娯楽」であり、また、その娯楽市場を支配する娯楽産業の実態からして、大衆娯楽ほんらいの機能——労働力の再生産、自己疎外からの回復、人間性の再発見——は著しくそこなわれ、事実上、娯楽産業による節度なき二重の収奪にさらされている、²⁾という問題である。つまり、娯楽志向の急速な膨張につれて、娯楽市場はまさに資本主義的利潤追求の原理のもとに拡充され、その底流をつき動かし、さら

に人々を欲望肥大へと駆りたてている。だが同時に、それらを取りまくかげりの部分も、市場構造のさまざまな矛盾の結果として、いっそう顕在化しつつあるという事実を見落すことはできない。

森口兼二(1956)は、戦後日本における大衆娯楽の顕著な傾向として、娯楽にさかれる時間や費用の量的増大とともに、そこにみられる質的な関心の特異性に着目し、1) 賭的娯楽の流行、2) 性的関心の露骨化、3) マス・コミュニケーション形式の娯楽の発達、の三つをあげ、その社会文化的背景についてすでに考察をすすめている。³⁾ こうした娯楽志向は、ますます強まる傾向にあるが、それらの社会的要因ないし条件については、客観情勢の変化にともなう体制支配による娯楽市場育成策とか消費性向刺戟策、あるいは、労働や余暇からの疎外の問題として、さまざまな形で多くの点が指摘されている。たとえば、岡部慶三(1960)は、その問題の基底にひそむ「戦後の余暇価値の創出を準備したと思われる体験内容」として、次のような点をあげている。⁴⁾ すなわち、a) 敗戦の結果もたらされた禁欲倫理への不信、およびその抑圧からの解放感、b) 余暇や消費に対する文化的欲求についての個の権利意識の芽生え、c) アメリカ文化との接触による消費生活面での欲望の肥大化、d) 国際関係の流動的、危機的状况を反映する国内の長期的見通しの欠除からくる不安感の増大、などなどが相互に関連しあっているという。

小論では、こうした、これまでの研究の諸成果^{<註2>}に学びつつ、その後の研究や諸資料の助けを借りて、戦後日本の大衆娯楽の主要な傾向を象徴すると思われる公認トバク、および、マス・メディア

<註1> かりに、「民衆娯楽」を普遍概念とすれば、「大衆娯楽」とは、ここでは、いちおう、ある歴史的局面にあらわれた特殊な存在形態として、具体的には、資本主義的生産様式のもとに組みこまれた娯楽の諸形態として、理解しておく。

にあらわれた性風俗の一側面について、それらを〈社会不安〉とのかかわりにおいて考察することを目的としている。

I

社会不安とは、ひとまず、「経済的、政治的条件の不安定あるいは変動の時期に、社会成員が経験する不安感」(日本社会心理学会『年報社会心理学』第9号編集委員会の定義による)としておく。が、これにはいくらか註釈を必要としよう。〈不安〉という概念は、これまで主に個人対象の神経症的、精神病理学的概念として理解されてきたが、ここでは〈不安〉を社会的なものとして、ひとつの認識として把握する見地に立つ。

戸坂潤(1936)が鋭く指摘したように、不安とひとくちにいても、それは基本的には、階級的利害の立場によって異なろう。支配者たちのいういわゆる治安維持上、風俗上の不安と、被支配者が、支配者の政策や思想およびその結果から抱かされる不安感とは決定的に異質なのである。つまり、被支配者であるわれわれ民衆の感じる不安は、支配層の利益のための「不安の説法」⁵⁾とは全く別のところにある。民衆のこの不安は、実にさまざまな内容を含んでいるが、その現実的な不安は、「肉体保護上の不安、政治的不自由の不安」⁶⁾等であろう。戦争に巻き込まれるかもしれぬ不安、民衆の組織活動や利害の自由な表現についての不安はもとより、「最も手近かなのは経済的消耗品となること(大衆課税、物価騰貴その他)」である。要するに、「人心の不安動揺なるものは、実は大衆の現実日常の物的生活利害関係そのもののことに過ぎない」⁷⁾のである。

戸坂によれば、したがって、「個人不安などというものは本当はないということになる。あるのは大衆の社会不安だけであり、あるいはそれについての個人不安という虚像だけなのだ」という。つまり、「真の不安は単なる不安ではなくて、その解消への力」であり、その意味で〈不安〉はひとつの認識だということである。⁸⁾

ただ問題は、当面、こうした経済的・政治的、

実からもたらされる社会心理としての不安感が、各種ギャンブルとかエロ雑誌などの氾濫といったいわば風俗的な事象を通してあらわれる過程には、おそらく、実に多様かつ複雑な構造と屈折が予想されるという点にある。

戦後日本は、「日米安保体制」のもとに——全面的な対米従属の強化、独占資本の再編成を軸として——ともかくもめざましい経済成長をとげた。だが、その過程では、階級的利害の対立は深まり、今や、成長政策のひずみや体制に内在するさまざまな社会病理を露呈させつつ、あるいは、米軍基地化の実質的な進展にともない、朝鮮、ベトナム戦争など現実には戦争に巻き込まれる危険性をひきおこしつつ、深刻な社会不安の素地をも増大させてきた。われわれは否応なく、重税、物価高首切り、公害、戦争、等々の不安に不断にさらされている、といっても過言ではあるまい。

ところで、大衆娯楽の膨張、娯楽産業による市場の展開は、一方で、人々のそうした日常的な社会不安を娯楽市場にひきよせることで、まさに日常的に吸収し、その表面化を巧妙にくもらせる役割を担ってきたともいえる。とりわけ、一大娯楽メディアとして出発したテレビ事業の発達は、その相乗効果に拍車をかけ、ばあいによっては、社会不安すら娯楽・慰安の対象として、利潤を生む要素として仕立て直しブラウン管上で観覧させている。つまり、現状における娯楽産業は、少くとも日常の批判的関心をにぶらせ、忘却させる有力な通路のひとつでもあるわけであり、このことから逆に、その繁栄現象の上には社会不安の実体そのものは顕在化されにくいという仕組みと屈折をともなっている。したがって、ここで両者のかかわりに考察の重点をおくとしても、それは多分に大衆娯楽につきまとう社会不安の陰^{かげ}を追うという限界性を避けられないように思う。

以上の点に留意しつつ、あえて大衆娯楽と社会不安との対応関係についてみると、それは、さきに指摘された大衆娯楽の現状に内在し、外在するほぼふたつの問題性と密接に関連する側面であることに気づく。

〈註2〉 「大衆娯楽」についての研究動向ならびに主要参考文献は、佐藤毅「最近の大衆娯楽・余暇の研究」『思想』1960, 5号, 加藤秀俊「大衆文化研究の動向」『思想』1958, 6号, および、拙稿「戦後日本の大衆芸術・娯楽」研究の動向」『関西学院大学社会学部紀要』第9・10合併号, 1964. 等参照。

第一には、大衆娯楽に費やされる費用や時間の量的増大、つまり、娯楽産業への過度なもたれかかりが——多くの人々にとって——現実の貧しい生活との間に著しく安定を欠いた状態を現出させているという事実である。そこに、社会不安のひとつの投影をみることもできよう。

第二に、大衆娯楽が、客観的には、民衆に対する社会的支配の道具のひとつとして、つまりは「慰安」としてあたえられ、その限りで社会秩序の安全弁の機能をも果しているという点である。ただ、そのばあい、不安感といわれる少なからぬ部分は、そこで発散され忘却されたように見えながら、それはあくまで一時的気晴らしにすぎず、さらに拡大再生産され、しかも抑圧されてゆくというメカニズムが作用する。その意味で、大衆娯楽は社会不安のひとつの潜在的なハケグチになりえているといつてよい。

俗に、「のみ、うつ、かう」をわが国では「三楽」といい、資本制生産のもとにある社会では、とりわけ、金銭と性との快楽追求の欲望の最もよく体现されたものとして、あこがれや地位の象徴

としてもはやされる。ここで考察の対象とする公認トバクおよび性的関心を「売りのもの」とする媒体は、基本的には、まさに資本制生産のもとの快楽追求の仕組みと論理を、いわば模範的に実現し表現する典型的な大衆娯楽の諸形態、ということができる。まず、これら大衆娯楽市場の実態の一面にふれることで、問題のありかをさぐることにしたい。

II

娯楽産業という用語は現状ではかなり多義的に使われており、また、その種の統計も不備で、市場規模の全貌はなかなかとらえにくい。野口・稲葉（前掲）によれば、アメリカで「レジャー産業」とよぶばあい、いわば能動的な娯楽が主体であるのに対し、日本で「レジャー産業」と同意に用いられる「娯楽産業」とか「娯楽企業」とかのばあい、「その中心になっているのは、受動的な観覧娯楽であって、大衆娯楽の遅れた発展段階に相当する」⁹⁾といわれる。

<第1表> 「レジャー産業」の市場規模（1965年）

1. サービスの提供を主とするレジャー産業（第3次産業）		百万円	%
受動的 ↓ 能動的	(1) 書籍、新聞、雑誌（週刊、月刊）	306,390	10.2
	(2) 興行娯楽	103,534	3.4
	① 興行娯楽（映画、演劇など）	99,136	
	② スポーツ興行（プロ野球、プロレス等）	4,398	
	(3) 射倅娯楽	532,486	17.7
	① 公営ギャンブル（競輪、競馬など）	134,772	
	② 民営ギャンブル	397,714	
	(4) 観光産業	566,181	18.9
	① 観光旅行	453,918	
	② 日帰り行楽	112,263	
2. 用具（物財）の提供を主とするレジャー産業（第2次産業）		百万円	%
受動的 ↓ 能動的	(1) テレビ、ラジオ機器製造業（および視聴料）	347,186	11.6
	(2) 酒造業（バー、キャバレー、料理屋などの風俗営業用も含む）	821,838	27.4
	(3) 趣味産業（カメラ、楽器、画材、玩具など）	169,012	5.6
	(4) スポーツ用具、被服製造業	157,121	5.2
計		3,003,748	100.0

資料：野村総合研究所（NRI）1967年2月、

松原洋三の再整理による（『朝日ジャーナル』1967年11月5日号、より引用）

一般に、娯楽産業の市場規模はいわゆる狭義のレジャー産業のそれとほぼ重なりあう領域とみてよからう。松原洋三(1967)の紹介になる<第一表>にその市場規模の概要は明らかだが¹⁰⁾、わが国の「レジャー」の実態は、消費的・受動的な大衆娯楽と「慰安旅行」——これら“団体観光旅行”の増加に代表されるように受動化傾向が強い——とにつつまれる。わずかに能動的な「慰安旅行」にしても、その内容は66年度で1年に1泊以上の旅行をした人は全体の約6割というつましきである。¹¹⁾あとの大部分は、酒で日頃のうさを捨て、タバコ、テレビに熱中し、加えて「セックスと人ダネ」の週刊誌(東販出版科学研究所の推計では65年度の発行部数約7億冊が、66年度では約8億1千万冊に達するという)にふける、といったいわば「のみ、うつ、みる」が娯楽市場の主役である。

松原によれば、とくにここ三、四年——つまり高度成長の破たん、人口の都市集中化の進展による生活環境の悪化、社会的アンバランスが指摘されてきた時期——の特徴として、「映画観覧やスポーツ観覧(プロ野球、大相撲など)が頭打ちないし低下傾向にあるのに対して、競馬、競輪、競艇、オートレース、さらに麻雀、パチンコ、宝くじといったギャンブル消費」が急速な伸びを示している。¹²⁾

<第2表>から<第5表>によっても明らかだがこの傾向は最近さらに強まりつつあることが注目される。たとえば、公営タバコの延入場者数を、58年度および'66年度についてみると、(<第2表>参照)競輪は約1.6倍に、競馬は「中央」「地方」とも3倍に、オートレース、競艇も約2倍に伸びている。また、マージャン、ボーリング、宝くじなどの伸びも著しい(<第3・4表>参照)。

<第2表> 公営タバコの1966年度および1958年度の入場者と売上額比較

注：()内は1958年度の概数

	売上金額 (百万円)	延入場者数 (千人)	1人当り購買額 (円)	備考
① 競輪	247,891.3 (75,873)	29,679.6 (18,982)	8,350 (4,000)	開催日数 3,813 (4,149)
② 中央競馬	121,827.8 (18,977)	5,378.9 (1,820)	22,650 (10,430)	開催日数 281 (212)
③ 地方競馬	138,208.8 (23,743)	13,270.6 (5,016)	10,420 (4,730)	開催日数 2,160 (2,165)
④ オートレース	30,077.3 (5,764)	4,240.4 (2,328)	7,090 (2,500)	
⑤ 競艇	138,597.0 (22,588)	16,546.0 (7,509)	8,380 (3,000)	
合計	676,602.2 (146,945)	69,115.5 (35,655)	—	

資料：(通産、農林、運輸、各省調べ)『読売年鑑』1968年版、『朝日年鑑』1964年版、および、野口・稲葉「前掲論文」参照、ただし、推定額は、各年鑑により若干の差がみられる。

'67年度の推計では、中央競馬の年間総売上げは約1,527億円、地方競馬を加えると、ざっと3,000億円をこえる。競輪も、'66年よりさらに伸び約2,800億円、競艇が約1,700億円、オートレースが約330億円、総計(推定)8,000億円に達するといわれる金額である。また、「全国のパチンコ台数は139万台、1台が1日平均1,000円かせぐという計算で推定すると、5,000億円という巨額」¹³⁾になるらしい。一方'45年7月に戦費調達目的で

“勝札”の名で登場した「宝くじ」は、現在では「地方くじ」一本となり全国の地方自治体の共同、単独またはブロックごとに発行されているが、この消化額も'66年度から飛躍をみせ——'58年を100とすると'66年度の指数は160——'67年度の消化額は76億円をこえるという。今や賞金1,000万円というふれこみで「1人当りの購買額増加をはじめ、女性や若い人がふえ組合せくじの人気がいいことなどは、競馬ブームに共通している」¹⁴⁾

といわれるほどの盛況である。

<第3表>

宝くじ売上高の推移 (単位: 1,000円)

年次	発行回数	発行額	消化額	納付金
1957	99	3,477,000	3,235,181	1,245,420
1958	134	4,131,000	3,924,723	1,490,564
1959	152	4,590,000	4,276,744	1,607,139
1960	154	4,850,000	4,236,749	1,581,510
1961	153	4,730,000	4,290,483	1,586,577
1962	159	4,781,000	4,363,408	1,619,018
1963	161	4,953,000	4,706,892	1,775,583
1964	165	5,235,000	5,051,866	1,900,069
1965	178	5,825,000	5,663,656	2,135,621
1966	177	6,516,000	6,473,323	2,479,392
1967	179	7,639,000	7,912,983	2,892,400

(注) 消化額=実際に売れた額。納付金=収益額で福祉施設や公共事業に寄与される。

資料: (勸銀調べ)『朝日年鑑』68年版

<第4表> 大阪府下遊技場施設の伸び

	1963年 (A)	1967年 (B)	(A)を100とした(B)の指数
パチンコ	118,000台	148,000台 (592店)	125.4
マージャン	9,300卓	18,900卓 (1,810店)	203.2
ボーリング	148レーン	1,383レーン (46店)	934.4
玉 突	700台	850台 (103店)	121.4

()内は遊技場数 (68年1月現在の概数)

資料: (大阪府警, 業者組合, 協会調べ) 『毎日新聞』(大阪)1968年1月26日号朝刊

<第5表>

大阪府下「春木競馬」(16市開催)の一市当り配分金の推移

年度	61	62	63	64	65	66	67
金額 (万円)	550	700	800	1,700	2,850	5,300	8,000

資料: 『毎日新聞』(大阪)1967年9月22日号朝刊

以上、いずれも賞金や景品として還元される金

額を考慮にいれても、とにかく驚くべき巨額の金が公認トバク市場に投じられていることになる。ただ、ここで重要なことは、単に金額だけが問題なのではない。浪費性の観点からいえば、膨張をつづける再軍備費^{<註2>}、政治家や官僚の汚職、大企業や大地主の脱税、社用族の“交際費”、あるいは現状での年間総広告費の増大なども相対的に問題となろう。

トバク消費の巨額化が問題だとするならば、それは各人の苦しい生計と貧しい生活環境の中での比重の高さとしてであり、まさに「低収入大衆にはかない夢とスリルを与えながら、彼らの乏しい所得を再収奪していく」¹⁵には、巨額にすぎるからである。

現代資本主義の重要な特質のひとつは、基本的に利害の対立する経済主体間の独占的競争が支配的であることだ、といわれる。つまり、利害の対立が存在するときには、一般に「ある経済主体の極大化への行動は、それと対立する他の経済主体の地位を極小化させずにはおかない(鈴木光男, 1959)」¹⁶のである。この資本制生産の仕組みと論理をひとつの擬似遊戯として、いわば模倣的に遊びの世界に実現したのが公認トバクの諸形態といえることができよう。胴元である地方自治体や企業が確実に一定の利潤をふところにした残りを、少数のだけかが偶然もうけを手にし、他の多くはすべて奪われるよう仕組まれている。

現代のトバクは、すべて利潤追求という“甘い生活”の夢につながっている。「競馬, 競輪すべてそこでは“資本家のマナビ”が行なわれるのである。しかし、この“マナビ”はまさに形だけである。じっさいの資本家の投資は損失の機会が少ないのに、ここでは逆に利潤の機会が少ない(梅原猛, 1962)」¹⁷のである。トバク・ファンの多くは、そのことを、トバクが「合意の収奪」であることを一応わきまえている。にもかかわらず、「～勝つと思うな思えば負け負けでもともとこの胸の……」などと鼻唄まじりに、期待と緊張をみながらせて競馬場へと向うのである。なぜなら、

<註3> 日本の68年度の防衛費予算は4,220億円。国民所得や国家予算に占める割合は、諸外国に比べると小さいようにみえるが、これを「暮らしの予算」と比べると必ずしも国民の負担が小さいことを意味しない。たとえば、航空自衛隊の主力戦闘機 F104J (1機約5億円)を基準にすると、「重症身障児対策費(17.5億円)は3機半、「へき地教育振興費(7.5億円)は1.5機、「母子福祉費(6億円)は約1機分となり、F104J1機が墜落すれば、「ガン予防対策費(3億円)の約2年分が吹っ飛んでしまうことになる。(『毎日新聞』<ニッポンの家計簿>1968.3月20日朝刊)なお、昨年わが国の企業の交際費は6,000億円を上回る見込み(国税庁調べ)だといわれ、また総広告費は推定4,594億円(電通調べ)になるという。:

金をもうけること、私的に所有することが人間のもっとも価値ある快樂とされている社会において、それら多くの人々は、まっとうな手段で利潤をあげる可能性からは完全にしめ出されているからである。「いくら働いても給料はあまり変わらず、利潤はいつも資本家の所有である」¹⁸⁾。人々は、まさにトバクにおいてのみ「利潤追求の主体」になるのであり、こうした不安や不満やらが、人々をトバクへと駆りたてるのであろう。

詩人・寺山修司(1967 a)は次のように表現する。

「競馬ファンは馬券を買わない。財布の底をほたいて“自分”を買っているのである。しかし、どの馬が自分の“もう一つの人生”を見事に勝ちぬいてくれるかを知るのは難しい。……ふみつけられる競馬新聞、煙草の吸殻と負けた馬券。そして、あてにならない予想屋の太鼓判。——それらの中を、人はかぎりなく迷いながら、“自分を買う”ことに熱中する。……」¹⁹⁾

政府や地方自治体が、こうしたトバク興行を主催し、公認している名目は、いわく「浮動購買力

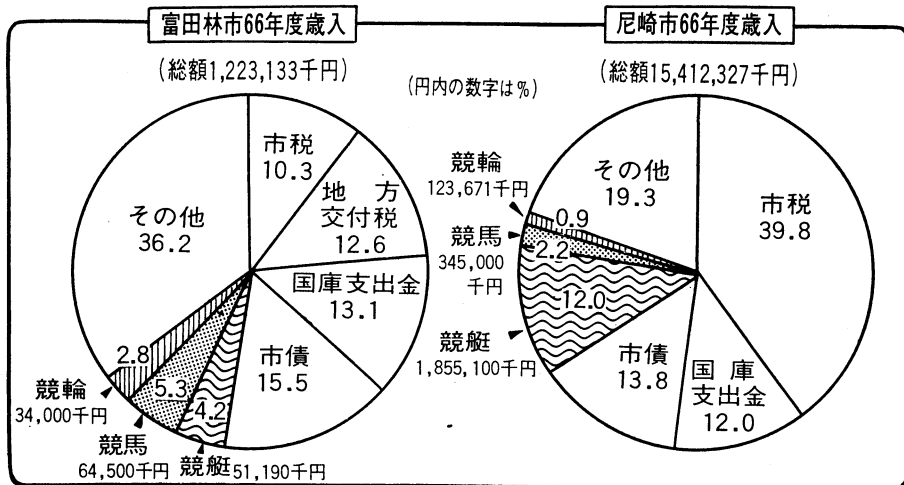
の吸収」「地方財政の救済」「災害復旧・公共事業の推進」といったたいへん“公共的”なものである。

また、パチンコやマージャンは、競輪や競馬とちがって「遊技」として法律で規定されている。だからパチンコホールやマージャン屋は「遊技場」、パチンコ台や麻雀パイは「遊技器」と呼ばれる。しかし、これらを法的にはなんと呼び慣わそうと、トバク化している事実は疑いない。そこで、大阪では、パチンコの景品の現金換えを合法化するため、「身体障害者、未亡人の就職保障」ひいては「暴力団による景品換えへの介入排除」という美名のもとに、「福祉事業協会」なる代行機関さえ設けられている。

私設トバクを一方では法律で禁止しながら、他方、トバクへの欲望肥大はこの種の“公共的”な名目で正当化され保護されているという矛盾がある。しかも、それら公認トバクに安易に依存している「三割自治」の地方財政の現状は、もはやぬきさしならぬ段階に立ち至っているのである。

<第1図> 地方財政に占める公営トバクの比重

—兵庫県尼崎市、大阪府富田林市のばあい—



資料：「毎日新聞」(大阪)1967年9月22日号 朝刊

京阪神地方のばあい、競馬、競輪、競艇など公営トバクは、国営もふくめて10ヶ所で行なわれているが、'66年で年間約1,250億円もの売上げがあり、その1割強が、国や地方自治体どころがりこむ勘定である。たとえば、岸和田市の'66年度一

般会計歳入合計は40億115万8,000円、うち競馬収入1億1,250万円、競輪5億370万円、競艇7,650万円で、トバク収入合計は6億9,270万円となり、これは全歳入の17.3%に当る。尼崎市は、公営トバクの収入だけでなんと年 23億2,000万円、全歳入

の15.1%で、これは人口5万人の富田林市の年間予算総額の二倍にも当る。また、富田林市も額こそ少ないが、歳入の12.2%、1億5,000万円がギャンブル収入。「同市内にはギャンブル場はないから、いずれも“他人のフンドシ”でかせいだもの。そのうえ、同市は財政再建団体に指示されている赤字市」²⁰。競馬廃止で^{註4}年1億円近い収入がなくなれば、せつかくの財政再建計画もふいになる見通しだという（〈第1図〉参照）。さらに、箕面市の場合、67年度で年間72日、競艇を単独開催しているが、その総売上げは108億2,700万円の前年度より38億円（5割増）もふえ、一般会計への繰入れも6億2,000万円と1億8,000万円の伸び。同年度の税込とほぼ同額で、歳入の3分の1を占める。

とにかく、公営トバク収入は、地方財政に大きな比重を占めており、全国の市町村もほぼ同様、この「アブク銭」がなくなれば財政が破たんするのは目にみえている、といった状態である。しかも、この「合意の収奪」になる結果が、歳出の重要部分である教育・土木・社会事業、災害復旧、住宅など直接に住民生活とかかわる諸事業の最有力の財源となっている。主催者側の次のような呼びかけも決して誇張とはいきれない。

「……競輪はあなたの生活とどんな関係にあるのでしょうか……それはあなたの御子達にガラスの破れていない温い教室を……病気のお友達には設備のゆきとどいた病院を……そしてあなたには長靴の要らない道路を、衛生的なお住居をと、いままでに〇×億円に上る額があなたの街を明るく美しく、住みよい所とするために使われてまいり

ました。（大阪府および兵庫県自転車振興会による1957年1月のラジオCM）²¹」

つまり、競輪や競馬なしには、住民の福祉はさらにみじめな苦しいものにならざるをえないという〈不安〉な状況に追いこまれている。人々は、乏しい財布の底をはたいて“馬”を買い“自分”を買って、かろうじて最低限の“公益”に浴することができるのである。

Ⅲ

トバク人口は年々増加する一方である。しかしそれらの層についての実証的データはあまり見当たらないようである。最近のものでは競輪ファンの実態について行われた65年6月の調査^{註5}がわずかにその手がかりをあたえてくれよう。

それによると競輪ファンの年齢層は、30代29.5%、40代25.9%、20代18.0%、50代17.6%、60才以上8.0%（不明1.0%）の順となり、30代40代が圧倒的に多い。これは56年調査^{註6}30代24.5%、40代22.2%、50代20.0%、20代17.0%、60才以上8.6%、20才以下0.4%、不明7.3%）とほぼ同様の傾向だ。職業別にみると、両年とも、商工業をトップに、事務、労務職が中心のようだが、いずれも無職の割合が比較的高率であることなどから推測して、いわゆる「ボーダーライン層」に近い人々がかなり多いことがわかる。65年までの競輪の経験年数では、10年以上のベテランが実に4割を占める一方、4年未満の新しいファン層も3割強になる。これらプロ化あるいはセミプロ化したファンの競輪がよいは、月に3～6日が最も多いが1週間以上のマニアが2割強を占める。車券の購

〈註4〉 競馬法によると、競馬開催権をもつのは競馬場所在地と著しい災害を受け、指定された市町村だけとされている。これまで、競馬法付則の特例により開催権を認められてきた市町村は、付則の期限切れによって、今年3月で資格を失うことになった。この4月からは、自分の行政管轄区域に、競馬場をもたない市町村自治体は、開催権を認められなくなったのである。だが、たとえば、大阪府では、大阪都市競馬組合加盟の16市の強力な陳情と選挙対策などから、「競馬関係者2000人の失業」問題などを名目に、大阪府が16市の開催権を肩代わりし、その収益を16市に配分することにきめ、事実上の再々延長となった。

〈註5〉 「競輪ファンの実態調査」日本自転車振興会および全国競輪施行協議会。65年6月、後樂園、平、静岡、松阪、甲子園、防府、高知、長崎の8競輪場入場者の20才以上の一般男女、6,450人（男95.5%、女4.4%）対象の面接調査、（昭和41年版、内閣総理大臣官房広報室編『世論調査年鑑』、1967,10）

〈註6〉 大阪府自転車振興会、1956.11.大阪中央競輪場、男1,091人、女68人対象の面接調査。（前掲『大阪競輪史』）もちろん、対象その他が異なるので厳密な意味で比較対照はできない。たとえば、職業分類は「60年調査」では、農林漁業4.5%、会社員29.9%、公務員6.3%、自由業7.6%、商業21.5%、工業14.7%、無職11.9%、その他2.7%（不明0.9）となっており、「56年調査」では、商工サービス業29.8%、事務職21.9%、労務職21.2%、無職14.9%、農林漁業2.7%、自由業・管理職2.2%、（不明7.3%）となっている。

〈第6表〉 競輪ファンの実態 (1965年6月) 〈前掲〈註5〉参照〉

競輪をいつ頃からはじめたか		月に何日ぐらい競輪に出かけるか		車券は1日いくらぐらい買うか	
最近	8.0%	たまにくる	5.7%	1,000円以内	8.1%
1年前	7.1	1日	4.8	3,000円以内	27.0
2~3年前	15.5	2日	13.6	6,000円以内	26.1
4~5年前	14.7	3~4日	26.8	8,000円以内	3.9
6~10年前	13.6	5~6日	27.1	10,000円以内	12.6
10年以上	40.4	7~10日	8.3	10,000円以上	11.0
N・R	0.7	10日以上	12.7	30,000円以上	7.1
計	100.0	N・R	1.0	N・R	4.2
		計	100.0	計	100.0

入額もかなり高い (〈第6表〉参照)。「競輪益金が地方財政, 社会福祉事業, スポーツの振興, 自転車その他の機械工業などの振興に役立っていることをご存じですか」の問いには86.8%が「知っている」と答えている。まさに「合意の収奪」である。

競馬のファン層は, 競輪に比べ「客ダネがいい」といわれたが, 最近では低所得の若年層が次第に進出し (67年9月の中央競馬会による実態調査では, 20, 30代は61年までは47%だったのが60%に伸びたという), また場外馬券売場の大盛況にともなって, かなりの低所得層を加えて「庶民化」しているのも事実のようだ。〈註7〉それにつれて, 競馬のトバク費用にからまる犯罪も激増した。本人の破滅, 転落はむろんのこと, 破産, 離婚, 一家心中など競輪・競馬がもたらした悲惨な家庭悲劇の例は, 枚挙にいとまがないほどである。

パチンコ, マージャンなど町の「遊技場」も連日大繁盛である。「遊技人口」はここ3年でほぼ倍増しているといわれる。大阪の場合, マージャン屋のふえ方は「1日に1軒の割合」といわれるほど。パチンコのばあい, 業者数は減ってはいるが, 台数は年々増加している。ともに, 店の大型化, デラックス化が目立ち, いわば弱肉強食によ

る企業集中が急速に進んでいる〈註8〉。これらの主要な客層は, 競馬や宝くじと同様に若年労働者を中心とするいわゆる中間層にふえているようである。(もっとも, 「昼間のパチンコ屋や競輪場や喫茶店などに遊休労働力や脱労労働力が氾濫している」²²⁾という現象はつづいている。) “合理化攻勢” やら仕事の画一化やらによるストレス解消, 社用のつきあい等, 理由はいろいろあろうが, ともかくマージャンもパチンコもすでに「技のお遊び」の要素をこえて, 「腕とツキをたよりに競う小さなギャンブル」²²⁾となった。

企業でのほかない昇進・昇給への期待と同じくそこでは「ついているか, いないか」が最大の関心事である。その種の腕をみがくことは, ひとつには「実力時代」にあって「実力」を発揮できる機会の乏しい人々にとっては, ひそかな運だめし, 力だめしのチャンスであり, また, 人間関係を巧みに泳ぐ, 交際技術にもなるという幻想となっている。

「～帰りに買った福神漬で, ひとりさみしく冷飯食べば古い虫歯がまた痛み出す これが男の生きる道 (わびしいなァ) ……」

という植木等の唄になぐさめられながら, 胃潰瘍型の青ざめたサラリーマンが二人で, 何かしきりに計算している。……自分が入社した日から, 退社するまでの月給

〈註7〉 場外馬券売場は都内で7ヶ所, 大阪2ヶ所, 全国で合計14ヶ所。「なかでも都内の後楽園, 浅草, 新宿などは通勤電車のラッシュ同様。背広にネクタイのホワイトカラー, 機械油にまみれた作業衣, 耳に赤エンピツをはさんだ青年, 寝不足そうに目を充血させたバーテン, ホステスなどの深夜族が, 押し合い, へし合い」の繁盛ぶりとか。(『サンデー毎日』1968年4月7日号, 150頁)

〈註8〉 ちなみに, パチンコ業界の特長は外国人経営者が多いことだという。大阪府警の67年8月調べによると, 大阪では, 日本人経営333店に対し, 外国人経営269店, うち, 韓国・朝鮮系179店, 中国・国府系90店。しかも台数は, 日本人系74,000台に対し, 外国人系は71,000台とほぼ伯仲し, 日本人経営店は外国人資本に押され気味の傾向だといわれる。「毎日新聞」(大阪)1968年1月26日号参照。

の総額の総計をしているのである。……さて、総計し終ってみると、自分がこれから停年まで毎日働く額は、岩下志麻が、映画出演のために、何か月位費す分に該当するかがはっきりしてくる。……『ああ、仕事なんかするの、嫌になっちゃったよ』というため息が彼らをブルーにしてしまう。……(寺山修司, 1967. b) 24)

こうした現状を反映してか、最近では「サラリーマン予備軍」である「学生大衆」の間で、パチンコ、マージャン、競輪・競馬が大はやりなもの目立った現象である。

トバク市場への若年層の進出は大企業労働者や学生層が主力であるといつてよい。中・小企業の若年労働者層の場合、トバク娯楽をも含めた余暇行動は、まだまだ収入や時間がそれにとまわな

いために、多くの面で制約されているのが実状であるようだ。

たとえば、榎並公雄(1967)は、「ごくありふれた」ある中堅企業における独身組合員の実態調査から、その余暇行動について、次のように指摘している。25)つまり、彼らの場合、基本的には「労働時間の長さ」と労働そのものから、まだ余暇がきりはなされず、労働力の再生産過程として、労働過程に従属する側面がつよい」という。たまの休日は、ただばくぜんと「テレビ・ごろ寝」で過ごす人が圧倒的に多く、あるいはそのわずかな時間を「友人との交際」に費すことでせいっぱいの現状である(〈第7表〉参照)。

〈第7表〉 休日の過ごし方

—ある化学工場独身男子組合員のばあい—

(単位: %, ただし複数回答を含む)

過ごし方 勤務別	テレビ ごろ寝	友人と交際	スポーツ	読書・趣味	映画・買物
A) 本社・支社	73.5	32.0	30.7	25.4	13.3
B) 大阪市工場	68.2	45.0	19.6	21.5	19.6
C) 中都市工場	73.0	52.0	16.2	13.0	19.5

- A) 京都・東京・大阪
- B) 京都・東京・大阪
- C) 四日市・大湊

〈第8表〉 どういう生活をもっとよくなりたいか

—ある化学工場独身男女組合員のばあい—

(単位: %, ただし複数回答を含む)

	住 宅	健康と休養	食生活	趣 味 レジャー	衣生活	家具調度	研究創作 活 動
男	58.7	32.5	32.2	23.3	14.9	12.1	10.9
女	52.2	28.8	10.8	23.4	12.6	25.2	10.8

〈第7・8表〉の資料: 榎並公雄「青年労働者の余暇と労働」『月刊労働問題』1967年12月号より引用。この組合は、家庭用および工業用洗済を主製品とする中堅企業、D化学(組合員数約1,000名)、平均年齢30才、勤務は三番交代制、対象は独身男女組合員(人数は不明)、年収平均40~60万円程度。調査日時は1967年はじめとのことである。

また、生活改善の要求の中で、「住生活」への欲求がいぜん高率なのは当然としても、「趣味・レジャー」よりも「健康と休養」をのぞむ声がつよく、かなりのウエイトを占めている事実は注目に値しよう(〈第8表〉参照)。榎並が指摘するように、「レジャー・ブーム」とか「レジャーの大衆化」などといわれる現象は、実際には「まだ労働者の生活に根づいた独自の生活機能としては定着していない」とみる方が妥当であるように思われる。

ただ、多くの人々が「自己疎外の回復」を娯楽や余暇に求めている。しかも、能動的なスポーツや戸外でのリクリエーション活動を楽しむ場所も機会にも乏しい。「これも労働時間の長さ、とくに長期休暇制度の欠如が、収入の少なさとともにブレーキをかけているようである」26)という。

戸外活動から閉め出された人々は、いきおいパチンコ、マージャンなど手っ取り早い「室内遊技」に群がって、わずかに「余暇」を楽しむのである。あるいは、場外馬券売場に殺到する人々と

って、そこにはもはや「緑のフィールドの解放感、一団の馬が空を行くスピード感」²⁷⁾などはない。あるのは、ただ刹那的なバクチ感覚だけなのである。

こうしたトバクの社会心理は、一般に逃避や代償行動の概念で説明されえようが、同時に、その種の微妙な論理を多様な解き口にわけいつきとめる作業も前提とされよう。その点で、たとえば、寺山修司(1967 a)は、資本制社会の「血統」優位の写しを競馬の世界にみている。競馬で尊重される「名血という思想」——たとえば、ラストレート系やフロリースカップ系などの「血統馬」は、人間でいえば「有産階級」に生れたというほどの意味で——いわば差別の思想だというのである。だから競馬の醍醐味は、「ダメな家系の馬が、いい家系の馬をやっつけて見せる」ところにあるという。²⁸⁾また加藤秀俊(1962)は、パチンコを「わたしと機械とだけかかわり合っている」「実存的な状況」での「孤独者のレジャー」としてとらえる。パチンコとの対決は「不思議な解放感」をあたえるという。なぜなら「そこでは、わたしは、じぶんの職業を忘れ、じぶんが日本人であることを忘れ、要するに、じぶんの人格すべてを忘れるから」²⁹⁾だという。だが、機械の盤面を血走った眼で凝視しながら時折みせるうつろな表情に出会うと、そこでの解放感——多くの人々にとって——少くともさわやかなものとは思われない。たしかに、「ものすごい狂騒のただなかに自分をほうりこみ、一発、二発、三発、重く湿って手のつけようなくこんぐらかったこの世のわずらわしさから自分を穴に向かって解放し、砕き、無化し、その破片をたたきこむのである(開高健, 1963)。」³⁰⁾そこに没入する限りで、人々の匿名性は一時的に徹底されるが、血走った眼やうつろな表情がすぐに消えさるわけではない。人々の多くは、「快樂とも苦痛とも、もはや、得体が知れぬ」³¹⁾深い疲労に沈みながらパチンコ・ホールを出てゆくのであり、その足どりは重いのである。

IV

大衆娯楽にみられる戦後のもう一方の花形は、性的関心を「売りもの」とする市場であろう。これは、トバク市場と並んで戦後急速に膨張しつつ

け、今日ではさらに異様な隆盛を誇っている。敗戦によって、既存の「性のタブー」は内外から大巾にとりはずされたとはいえ、それは決して真の「性の解放」とはならず、正しくは、「性が金銭的消費と投機の対象」³²⁾となることでいわば性的欲望の「異常肥大症」を巻きおこしたのである。

なかでも、たとえば、大量の各種週刊誌やスポーツ・娯楽紙などの露骨な「セックス・ダネ」、婦人雑誌の「性技巧」³³⁾「実用」記事、エロ・グロ雑誌やブルー・フィルムなどピンク映画や、情事でにぎわう小説の氾濫、あるいは、テレビ・ラジオの「よろめきドラマ」などなど、マス・メディアにみられる性的関心の繁栄現象ないし狂態ぶりはすさまじい。もっとも、単にマス・メディアに限らず、「街頭のいたるところに性がひしめいている。」³³⁾上は上流階級の「高級料亭」から下は温泉マークやアルサロまで、「風俗営業」やらその種のまがいものが乱立している。「戦前、おもてに出されず、多くは売娼や猥談という内密の世界でみだされてきた性的関心は、いまや公然と、むしろおさえつけられていたものが反撥する勢い(森口1956)」³⁴⁾で露骨化し、商品化したのである。

こうした傾向に拍車をかけ、全国津々浦々に淫びなセックス・ムードをまき散らしたのが、マスコミ諸企業であり、それら一連の資本の力であったといってもいいすぎではあるまい。

仲村祥一(1967)は、今日の性風俗全般にみられる病理性は、「過剰なまでの氾濫の底にある衰弱である」と指摘し、性風俗にあらわれた「貧困ゆえの繁栄」現象を、すでに鋭く分析している。³⁵⁾

たとえば、家庭内でも「いぜんとして性は男性のもの」だという。「女性の現実的解放がなされず、結婚が一種の就職を意味する夫婦関係のなかでは、性における愛情の質についての本格的な問いかけは回避され、「性生活の知恵」が享楽の量を目ざして工夫」され、「家庭の性をいよいよ妓楼に近づけ」ているのである。女性週刊誌や婦人雑誌の編集がこうした傾向を増幅しているのはいうまでもないが、さらに、職場における性も資本の管理下にあり、そこでは「企業経営方針が性の内部に侵入」し、結婚やバース・コントロールにまで干渉しているという。仲村は、「家庭内に閉じ

こもった性,自由な愛情交換でない不安な性,取引し売買されるための性」の病理について,そうした性風俗の変幻多彩な姿こそは,「かえて,生活の基層において国民の生活が窮乏化し,抑圧されているしるしであろう」と指摘している。³⁶⁾

戦後のマス・コミ過程における性の「異常肥大症」の出発は,たとえば,単行本での田村泰次郎『肉体の門』(1947)の出版,大衆娯楽紙『内外タイムス』の発刊(1946,10月),雑誌『夫婦生活』の登場(1949,5月)などに象徴されていよう。こうしたマス・メディアにおける性的関心の増大は,今日ではやや変形されながらも,「セックス・ダネ」みなぎる三文(大衆)小説,エロ雑誌,週刊誌,スポーツ・娯楽紙や映画・テレビ・ラジオなど各種マス・メディアにいっそう大規模化され立体化されてひきつがれている。『肉体の門』や『今日我欲情す』などいわゆる肉体文学の進出は,作者のいう「肉体の生理こそ,最も強烈にして唯一の人間の営為」であり,「肉体の探求の徹底」による日本的感傷の範囲をつきぬけたたくましい人間の確立³⁷⁾という主張からしても,単なるエロ本ブームと全く同質のものとは断ずることはできない。だが,これらは,その後の石原慎太郎『太陽の季節』(1955)や三島由紀夫『美德のよろめき』(1957)などと共に,その意図はとかくとしても,性的「異常肥大症」への関心をふっとうさせた点からすればマス・コミ過程で特異な位置を占める作品群といえよう。

横山貞子(1962)によれば,雑誌『夫婦生活』は,「まず,夫婦という単位の人間の自由の確保」の主張を掲げて世に出た。実際は,「一軒の家に数家族が同居し,あるいは一部屋に複数の夫婦が住む例もあるという住宅難」時代に,夫婦の性生活をいかに家族のメンバーから隔離し,防音するかといった実用記事で人気を呼んだという。しかし,狭い部屋でじっとがまんせざるをえない人々にとって,「室内改造」など事実上できない相談である。『夫婦生活』は,その意味でいわば「夫婦の独立を理念としてうち出した」ものとみられ,その限りで旧い道徳をくずす上では,過渡的にはたしかに有意義だったと指摘されている。³⁸⁾

だが,仲村(前掲)がいうように,「性的欲求が夫婦間において正当にみなされるためには,独

立した家屋と個室,育児や生活に対する不安の解消という前提が必要」である以上,「これらのものがみだされず,生活の理念とそれへ向う日々計画的営為が可能でないところには類発した性」³⁹⁾のみがまんえんする。事実『夫婦生活』も「啓蒙」を名のる「技巧記事」中心から次第にのぞき趣味と煽情に墮して,エロ雑誌におさまりの終末をたどったのである。

1958年4月に施行された売春禁止法は,「より収入の高い者に,より大きい男女関係の自由が与えられるという現状を明確にする結果(横山,1962)」⁴⁰⁾だけをもたらした。赤線・青線業者(厚生省調べで全国で18,398名)は料亭・アルサロなどへと「転業」し,従業婦(51,875名)の多くも更生の道を閉ざされたまま,芸妓,女給,料理店女中などへと「転進」した。赤坂や祇園などの高級芸者置屋やナイト・クラブなどは,上流階級独占の性的サービス売買業として温存されたが,「基本的人権の擁護」のために大衆の欲望のはげぐちには,より高額な支出と性病の危険性が用意されたのである。

『内外タイムス』を筆頭とするイエロー・ペーパーや各種エロ本あるいは「ツヤ・ダネ」本位の娯楽雑誌は,赤線から遠ざけられた大衆をもつつみこんで,58年頃からさらに盛況をみせた。とりわけ『内外タイムス』は,競輪・競馬などの「スポーツ」記事,艶笑記事に実話記事,あわせて性生活の「実用」記事など満載して人気を呼び,「夕刊紙でありながら,はやくから後の週刊誌ブームを予言する役割をはたした」⁴¹⁾といわれる。(ただ,その取材方針はともかく,具体的内容は,同紙が標榜していたという「大衆に笑いと憩いと活力を」のモットーにはあまりに貧しいものであったといわざるをえないようだ。)また,戦後の一時期全盛だった娯楽雑誌『りべらる』や『ロマンス』をしのいで,十代の人気もの『平凡』が急速にのし上ってきたのも,ひとつには,その連載小説「乙女の性典」(小糸のぶ原作)によってであるという事実も注目されよう。⁴²⁾これらはいずれも,収入も低く満足な家もなく,適令期にありながら思うように結婚できない成人男女や青年層の最も手軽で安全な性のはげぐちであり,慰安的な「大衆読みもの」だったのである。

今や毎週1,400万部という「巨大なクズカゴ文化」を出現させた週刊誌ブームは、最近ではその中心は、どうやら、ニュース本位の新聞社週刊誌から、のぞき趣味とセックス本位の出版社週刊誌へと移行しつつあるようだ。⁴³⁾『平凡パンチ』や『プレイボーイ』など『キミ雑誌』のテーマは、大別するとセックス、衣裳、旅行と自動車の四つしかない。『女性自身』『週刊女性』など女性週刊誌も、つまりはセックス・ゴシップ、実用記事で成立っている。いずれも、日常瑣末な皮膚感覚にべったりともたれかかり、それらを所与の必然と受けることで、いわば現実崇拜のわなにおちいつている。

こうしたマス・コミで駆りたてられる飽くなき享楽欲は、人々に性への恒常的な飢餓意識を植えつける。竹中芳(1967)の調査報告によれば、実に多くの人々が、遊戯としての性にあこがれ、かつ熱中し、さらに渴望していることが示されている⁴⁴⁾。(もっとも、この種のレポートの実証性には疑わしい点多々あるが、少くとも一般的傾向についてのひとつの手がかりとしての意味はある。)結婚の経済的困難など「性の解放」から疎外されればされるほど、資本にとって性は有力な利潤の源泉となるのである。また、ホステスやガイド嬢の多くが、性的サービスを職業としてえらんだのは「生活のため」と答えている。彼女らの「転落」の動機や階層構造には「貧困」の陰が濃く、かつての赤線の売春婦たちのそれと酷似している、と指摘されている。⁴⁵⁾

性風俗のゆがんだ氾濫は、今日ではむしろ権力による介入との関連で新たな<不安>を認識させよう。一方で、それは、「俗悪週刊誌」など「悪書」追放の「三ナイ運動」として展開され、警視庁ではさらに「四ナイ運動」<読まない、見せない、売らせない、つぐらない>にまで拡げられる方針

といわれる。これらを突破口とする権力による「思想・言論の自由」侵害への危険性は、これまでの歴史的経験にてしてても充分予想されるところである。

このことと微妙に関連する問題として、他方では、かつての「チャタレイ裁判」をはじめとして既成の性道徳に挑戦し、批判を向ける芸術作品は極力弾圧されるという傾向がみられる。それらの文学的主張にひそむ「ワイセツ性」が体制の淳風美俗に反するとして摘発されるわけだが、しかし、街頭の店先では純然たるエロ本類はなかば公然と売られている。そこにはひとつのからくりがある。多田道太郎(1967)は、「まごうかたないワイセツ文書」の特徴のひとつは、セックス描写と通俗道徳とが共存していることだという。「意外にそれは『道徳的』なのだ。……セックスについての無用の恐怖感が、そうした文書の作者と読者とに『道徳』の蔽いを必要ならしめるのである。」⁴⁶⁾人々の多くは、既成の価値と共存するワイセツの快味にこすられて、いわば「そうした小さな汚い秘密性」⁴⁷⁾のなかに閉じこめられてしまうのである。

戸坂潤(1937)がいうように、快感にもおのずから飽和点がある。「ここが快楽の危機であって、ここから快楽の浪費と快楽浪費そのものの不快な快楽とが生れる」⁴⁸⁾のである。トバク市場の隆盛も、性的異常肥大症も、もはや快楽ではなくなって「自棄的な暇つぶし」「自暴的な退窟凌ぎ」⁴⁹⁾の徴候が著しい。われわれは、トバクや性の甘い刺戟にむしばまれつつ「いってみれば、『ムリ』して遊んでいる」⁵⁰⁾のであるまいか。だとすれば、娯楽享受におけるこうした幻想をいかに断ち切るかが、今後の余暇設計とも関連して、今日当面の課題となる。このことは、現実日常生活での不安感の克服と決して無縁ではありえない。

< 引 用 文 献 >

- 1) 清水幾太郎「大衆娯楽について」『思想』1951. 8号, 1頁
- 2) 野口雄一郎・稲葉三千男「大衆娯楽と娯楽産業」『思想』1960. 5号
- 3) 森口兼二「娯楽」講座『人間の科学3・人間と社会』中山書店, 1956., 196~203頁
- 4) 岡部慶三「娯楽志向と生活様式の変化」『思想』1960. 5号, 56~58頁
- 5) 戸坂潤「不安の二種類」1936, 『戸坂潤全集 第5巻』勁草書房 1967., 30~33頁
- 6) 同 上
- 7) 同 上

- 8) 同 上
- 9) 野口・稲葉「前掲論文」82頁
- 10) 松原洋三「新たなムチ・レジャー産業の力学」『朝日ジャーナル』1967, 11月5日号
- 11) 総理府編『観光白書—昭和42年版』1967
- 12) 松原「前掲論文」
- 13) 「毎日新聞」〈余録〉1967. 12月27日 朝刊
- 14) 『朝日年鑑』1967年版, 752頁
- 15) 野口・稲葉「前掲論文」88頁
- 16) 鈴木光男『ゲームの理論』勁草書房, 1959, 2頁
- 17) 梅原 猛「余暇について」『理想』1962. 3号, 23頁
- 18) 同 上
- 19) 寺山修司『思想への望郷(下)』大光社, 1967, 337頁
- 20) 「毎日新聞」(大阪) 1967. 9月22日号 朝刊
- 21) 大阪府自転車振興会『大阪競輪史』1958, 377頁
- 22) 野口・稲葉「前掲論文」89頁
- 23) 「毎日新聞」(大阪) 1968. 1月26日号 朝刊
- 24) 寺山修司『思想への望郷(上)』大光社, 1967, 195頁
- 25) 榎並公雄「青年労働者の余暇と労働」『月刊労働問題』1967. 12号, 72頁
- 26) 同 上
- 27) 江口栄治「トバクに関して」『マス・コミの倫理』春秋社, 1958, 282~3頁
- 28) 寺山『前掲書』(註19) 315~6頁
- 29) 加藤秀俊『眼と耳の世界』朝日新聞社, 1962, 11~12頁
- 30) 開高 健『日本人の遊び場』朝日新聞社, 1963, 38頁
- 31) 同 上
- 32) 仲村祥一『社会体制の病理学』汐文社, 1967, 114頁
- 33) 同 上 ,113頁
- 34) 森口「前掲論文」200頁
- 35) 仲林「風俗の病理」『前掲書』100~124頁
- 36) 同 上
- 37) 黒 豹介「肉体文学の生理」『思想の科学』(先駆社版) 1949. 9号
- 38) 横山貞子「『夫婦生活』におけるユートピアの創造と終焉」『思想の科学』(思想の科学社版) 1962.6号
- 39) 仲村『前掲書』112頁
- 40) 横山「前掲論文」40頁
- 41) 虫明亜呂無「欲望の戦後史」『思想の科学』(中央公論社版) 1961. 9号, 23頁
- 42) 『週刊サンケイ』(特集: 雑誌『平凡』をハダカにする) 1954. 9月12日号
- 43) 『自由』編集部「ニッポン・レポート(8), 週刊誌王国」『自由』1967, 10号
- 44) 竹中 芳『浮気のレポート・一夫一婦制度への挑戦』秋田書房, 1967
- 45) 同 上
- 46) 多田道太郎「チャタレイ夫人の恋人」『ベストセラー物語(上)』朝日新聞社, 1967, 133頁
- 47) 同 上
- 48) 戸坂 潤「娯楽論——民衆と娯楽・その積極性と社会性」『唯物論研究』1937. 8号, 14~15頁
- 49) 同 上, 15頁
- 50) 野間宏, 多田道太郎(対談)「現在の不安と欲望」『思想の科学』(中央公論社版) 1961. 9号, 2頁